

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ 言語活動の潮流を読む： 英語プレゼンテーション..... 1	● 授業の玉手箱 「よい授業についての一考察」..... 4
● 2012 年度勉強会 「英語の教え方教室」 報告 2	● 書籍紹介 『なぜあの人は中学英語でもネイティブと仕事ができるのか』.. 4
第 15 回勉強会 「英語の教え方教室」..... 2	● 教育実習参観..... 4
第 16 回勉強会 「英語の教え方教室」..... 3	● 編集後記・10 月勉強会案内 4

巻頭エッセイ 言語活動の潮流を読む： 英語プレゼンテーション

東條 加寿子

何気なく合わせたテレビのチャンネル^{注1)}で、クレイ・シャーキー (Clay Shirky) のプレゼンテーションを聴いた。聴き終って圧倒された。テーマは、Cognitive Surplus (知的余剰)。ネット時代の現代、ウィキペディアなどにみられるように、人はなぜ自分の書いたものや制作したものをネット上に無料で公開するのかについて「知的余剰」という独自の概念を使って説明がなされている。シャーキーによれば、経済的対価を求めることなく、時間的余剰を活用してネット世界で繰り広げられている我々の知的活動は、今や一つの新しい文化 (Culture of Generosity) を創出させるまでに至っている。そして、その文化においては、経済的制約 (economic constraints) よりも社会的制約 (social constraints) が人々の行動を支配しているという。ちなみに、シャーキーは同タイトルの著書を 2010 年に出版している^{注2)}。わずか 20 分ほどのこのプレゼンテーションは、シャーキー自身の 1 冊の著書に匹敵するどころか、その圧倒的な説得力と知的興奮、さらに番組内外の聴衆との一体感において、異次元の産物であった。プレゼンテーションの威力である。

今やプレゼンテーションの時代である。故スティーブ・ジョブズはプレゼンテーションの天才と称され、彼のプレゼンテーションがなぜ感動を与え続けるのか、その技術や秘訣を分析する本が次々に出版されている^{注3)}。ビジネスの世界では毎日 3,000 万件以上のプレゼンテーションが行われており、ビジネスの成否はプレゼンテーションの成否によるともいわれる。実際、アップル社製品の躍進はジョブズのプレゼンテーションの成功によるところが大きいといえるのかもしれない。

しかし、冒頭で紹介したクレイ・シャーキーのプレゼンテーションはビジネスプレゼンテーションではない。このプレゼンテーションは TED Conference で行われたプレゼンテーションの一つである。調べてみると、TED (Technology, Entertainment, Design) はアメリカの非営利団体で、Ideas worth spreading を謳い文句に年 1 回、テーマを定めて Conference を主催している。Conference では多くの著名人がプレゼンテーションを行い、聴衆として多くの人々が参加者する。ここで行われたプレゼンテーションを収録した動画アーカイブは圧巻で、膨大な数のプレゼンテーションがウェブ上で視聴できる^{注4)}。

さて、人々の英知を広めるためには、種々の手段がある。本として著す、スピーチで語る、またシャーキーの知的余剰活動しながらにウェブ上で作品を公開する、等々。しかるに、それらの手段を選択しないで、なぜ人は空間を共有してリアルタイムで語りかけ、リアルタイムで耳を傾けるのであろうか。なぜ、TED Conference のプレゼンテーションが一大現象となっているのであろうか。

プレゼンテーションでは、スピーカーは集まった聴衆に向かって壇

上で話をするが、スクリーンにビジュアル映像を映し出したり、物を持ち込んだりと、効果的な演出が可能である。またスピーチと違ってスピーカーは壇上で比較的自由に動き回る。そして、あらかじめ比較的短い制限時間が決められている。こういった特徴は、プレゼンテーションでは聴衆に「どのように伝えるか」が「何を伝えるか」に勝るとも劣らず重要であることを反映している。スピーカーは与えられた環境の中で聴衆に効果的に英知を伝達することに意識的・無意識的に工夫を凝らす。筆者は英語プレゼンテーションの特徴について研究しているが、プレゼンテーションは従来のスピーチや講演と比べて、話し言葉の特徴をはるかに色濃く備えている。具体的に例を挙げると、効果的なプレゼンテーションでは、代名詞 you の使用頻度が顕著に高く、また、いわゆる inclusive we と言われる聴衆を内包する人称代名詞が多用されることがわかっている。いずれも、聴衆に働きかけ、聴衆を巻き込む効果をもっている。結果として、聴衆と一体化した時空を生み出す。TED Conference では、スピーカーの intellectual power, emotional power, power of contribution in the world が注ぎ込まれ、スピーカーと聴衆が共有する経験は unforgettable moment となり、一つの感動が生まれるという。プレゼンテーションの本質や魅力がここにある。

人は、自分の考えを伝えたいという生来的な欲求をもっているといわれる。文字で伝える言語活動。話して伝える言語活動。近年ではツイッターやブログにみられるように話し言葉を文字化するという言語活動も盛んである。同時に、人はやはり、人に向かって話すことに大きな関心を持ち魅力を感じ続けている。スピーチの進化系、プレゼンテーションはシャーキーの説く知的余剰を伏線に、現代的言語活動として時代の潮流に乗っているのであろう。

今回、プレゼンテーションについて考えてみたのは、英語教育に関わるものとして、時代の潮流を肌で感じ取っていることが、生徒たちに英語の感動を伝える一つの条件であると思うからである。そして、言うまでもなく、プレゼンテーションは英語教育において無限の可能性を秘めていると思うからである。

注1) <http://www.nhk.or.jp/superpresentation/> (NHK E テレ スーパープレゼンテーション 番組 HP)

注2) Shirky, Clay (2010). *Cognitive Surplus: Creativity and Generosity in a Connected Age*. ALLEN LANE.

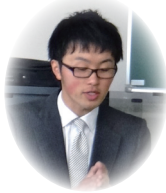
注3) Gallo, Carmine (2010). *The Presentation Secrets of Steve Jobs: How to Be Insanely Great in Front of Any Audience*. McGraw-Hill.

注4) <http://www.ted.com/> (TED Ideas worth spreading)

第 15 回勉強会「英語の教え方教室」 5 月 12 日(土)

■ 「Post-reading 活動の効果について 一要約活動に焦点を当てて」
滋賀県立米原高等学校 熊谷 向祐 教諭

教員3年目を迎えられた熊谷先生、実はその前の3年間はサラリーマン時代、換気扇を売っていたとご自身の経歴を披露された。今でもデパートなどのトイレに入るとすぐに見たくなるのが換気扇であると話され、みごとな「つかみ」で参加者の笑いを誘われた。その上、好きな言葉として、「You can always do more than you think you can (Gilbert Kaplan)」を紹介され、教員としてのひたむきな姿勢、自身の教育哲学を示された。



熊谷先生は教員1年目から今回の発表の研究課題をもって授業に臨まれた。設定の理由は、「英語 I」の授業を行ったあと少し日をおいて、生徒に学習内容を尋ねると、「何の話やったけ？」と回答される始末。本文の主旨を理解できていないのではと考え、「本文を要約するには、本文の主旨を理解する必要がある。そのためには Post-reading 活動として要約活動を行うことが効果的である」と仮説を立て実践活動を行われた。

研究方法は、①3種類の要約活動(各セクションの読解終了後、要約活動をする)、②フィードバック(生徒の要約を点検し、フィードバックを行う)、③検証(定期考査の結果や、アンケート結果から効果の検証を行う)である。

3種類の要約活動とは、A：口頭での要約活動(ペアワーク)：教科書を見ずに、日本語で。制限時間1分。B：記述による要約活動1：教科書を見て、英語で。文字数制限あり。C：記述による要約活動2：教科書を見ずに、英語で。文字数制限あり。

フィードバックは、1：要約例(教師作成)、2：ポイント、3：よくある間違い、4：優秀な要約の紹介、をプリントとしてまとめ解説する。『要約は有意義な活動だった?』というアンケート結果(事後調査12月実施)で、「意義を感じなかった:8人」に対し「意義を感じた:52人」であった。「生徒の取り組み状況と手ごたえ」としては、3種類の要約活動を以下のように分析された。

A：口頭要約(教科書見ず、日本語で。1分間)

「制限時間のおかげで、自熱した活動になる」「教科書の内容を細かく説明してしまい、1分では時間が足りない生徒が多かった」が次の活動に繋がるのではと捉えられた。

B：記述1(教科書見て、英語で)

「回を追うごとに、要約に盛り込むべきポイントを掴めるようになってきた」「教科書の表現をほとんどそのまま使っている」から、教科書をじっくり読み返している様子うかがえると判断された。

C：記述2(教科書見ず、英語で)

「非常に難しそう」「文法的な間違いは多いが、自分の知っている英語で書こうとする」から、Bの活動の重要性に気付くのではないかと、教科書の表現を別の表現で書き換える練習になるのではないかと考えられた。

最終的には、この3ラウンドの要約活動の組み合わせで効果が高まるのではないかとされ、まとめとして5つのメリットを述べられた。

1. 理解が深まる：自分が理解できていない箇所に気付くことができる
2. 教科書を読む機会：要約活動を通して、何度も教科書を読ませることができる。
3. 英文書く機会：教科書中の表現を書く機会を与えることができる。
4. 書き換える機会：教科書中の表現を他の表現で書き換える機会を与えることができる。
5. 教師のフォロー：間違え



やすい箇所、理解不足の箇所をすぐに知り、フィードバックできる。今後の課題として、「効果のデータの裏づけ」「長期的な生徒の変化」「教材や生徒に合わせたより適切な要約方法の模索」「要約力を向上させる指導法の模索」を挙げられた。

ここで、「理解を目的としてサマリー・ライティングをさせるのがいいのか、サマリー・ライティングの修得を目的として理解を助けるのか。どうあるべきか」との質問を皮切りにフロアーとの討論に入った。発表者は、生徒の記憶に留まらない内容理解に対策を考え、3ラウンドの要約活動を行った。生徒がまとめた英文には、基本的な文法の間違いが比較的多くあることなどから、英語力を育成するという観点として、ライティングの力の育成に重心を置くべきではないか、また要約の方法の修得を押さええるべきではないかと意見が出された。また、3種類・3ラウンドの要約活動については、授業には波があるので、ラウンドがあることが生徒個人や教員自身にとっても効果的であると考えるとの意見もあった。

第一ラウンドの日本語で行う要約活動について、学生に、「英語か、日本語でやるか、君たちはどちらがよいと思うか」と尋ねた。7人のうち5人は「日本語で」2人は「英語で」であった。「確実な理解には日本語で」や、「英語が得意でない生徒もおりいきなり英語で行うにはハードルが高すぎる」などが「日本語で派」、「英語で派」は、「英語で述べるのであれば英語を話しているという実感が得られ、ある種の達成感を持つことができる」などの意見が出された。

また、参加の先生から、「サマリー」というのは、パートごとに行うものではないとの指摘があった。レッスン全体を通して流れがまとまっているものでしかサマリーはできない。パート毎では、トピック・センテンスやサポート・センテンスを確認させ、リテリングやリプロダクションをさせることにならないか。また、教科書のレッスンが必ずしも、イントロ、ボディ、コンクルージョンがある論説文ばかりではないので、その点も考えないといけないという発言もあった。

「人間は困った時に学ぶものである。したがって教員は生徒を困らせて学ばせることが大切である」と負荷をかけた指導の重要性を話される参加の先生もおられた。

このあと、2年目の実践として、oral communicationの授業での活動を紹介された。1学期 Show and Tell：自己紹介、アフレコ：病院での会話(海外ドラマのワンシーン)、2学期 Skit making：レストランで起きたハプニング、Speech Contest：自分の夢について、3学期 Presentation：日本の文化をALTに紹介しよう、Discussion：「住むなら米原か東京か」「制服は廃止すべきか」、Debate：「米原高校は宿題を出すべきではない」

フロアーからは、アフレコなどでは特に、オーラルインタープリテーションを意識し、場面状況や立場などを理解し、その雰囲気伝える表現が必要であるとか、ディベートではスクリプトを読んだりしているだけでは、結果的かみ合わないやりとりが行われることに終始する場合がある。5時間という設定では厳しいのではないかという意見があった。

■ 「『授業改善への試み』～この1年間を振り返って～」
滋賀県立石山高等学校 戸田 行彦 教諭

戸田先生は、初担任・新クラブ顧問・初学年英語担当と、これら三種の仕事に昨年度従事し、初めて一人前の教師になれるとの嬉しい思いで、決意新たに英語授業改革の基本は英語 Iにあると、英語 Iのスタイルを根本的に見直そうと授業改善に臨まれた。その際、各学期が始まる前に学年別の教科会議で何時間もかけて話し合いをし、どんなデザインで授業を進めるのかとことん話し合われた。



1学期の授業デザイン

□ 予習：配付した予習プリントで日本語空所()を埋める
* 予習で和訳作成はさせなかった。

サイトランスレーションシートをB4サイズで両面印刷で作成、B5

第 16 回勉強会「英語の教え方教室」 6月2日(土)

■「英語ディベート授業実践報告

ーサーキットスピーチの活用と授業の実際ー

兵庫県立尼崎小田高等学校 小林 哲 教諭

単に行ったことを紹介するのではなく、「これらの活動を通してどんな力をつけるのか(目的・目標)」「なぜそれが必要か、なぜこの形式なのか(理由)」「どのような結果に結びつくか。(結果・効果)」「どうすればより効果が上がるのか(方法)」について、みなさんと議論したいという前置きで、小林先生の実践報告が始まった。



最初に、尼崎小田高校の概略を話され、次に兵庫県英語ディベート大会について説明され、昨年度は兵庫県下より参加校は20校に上ったとのことである。兵庫方式のディベートであり、数値化する評価方式についての説明があった。評価は、「立論」が内容(6点満点)、証拠(6点満点)、英語(3点満点)、「尋問」が内容(6点満点)、英語(3点満点)、「反駁」が内容(6点満点)、英語(3点満点)の合計48点満点のスコアで勝敗を決めるものである。6点基準は、論点を3つ出すことを前提としている。提示すれば各1点、説得性があればそれぞれの論点に1点加え6点となる評価方法であった。また、「尋問」や「反駁」の際には3人以上が発言しない場合は減点をするという方法が兵庫オリジナル・ルールであった。

参加者から、0(ゼロ)か1で評価する方法は、誰にもできそうであるが、かなりおおよそで、差がつかない評価になるのではないかと主観的になる。点数で評価することに、ディベートの本質があるのではなく、論の展開や議論そのものこそ評価すべきではないか。など意見が出た。

小林先生によると、初歩段階の生徒には数値がわかりやすく、それが励みになることがあるとのことであった。確かに、論の展開をジャッジするには、ジャッジとして論を整理して展開する能力が必要である。生徒にはそこまで無理かもしれないので、こうした数値化シートが扱いやすいだろう。しかしながら、指導者としての教員は、論の展開における指摘を、板書しながら行うチョークディベートなどを行うことが必要となると思われる。

次に、サーキットスピーチについて話された。

A・B2グループの対抗で、Aグループが、スピーチを配付の原稿枠内の分類による16行で完成させ、ALTによるチェックを受ける。本番ではその原稿を読み上げる。相手側Bチームは聞き取り用紙に書き取っていく。聞き取り不明な部分に関して、原稿読み上げAチームに、「16文全文、Did you say, _____?」「What did you say in # sentences?」など尋ねながら、聞き取った内容を完成させる作業を行う。第三者であるジャッジは質問の個数をカウントしてシート上にカウントを記す。回答の回数も同様に記す。こちらが最初に実施される活動である。

原稿を書く作業について、このようなフォーマットに慣れさせることは大切であると意見があった。ただ、イントロ2行で、ボディが3パート各4行、結論2行で言い表せるのか、16行の文で完成させるのは、かなり難しいのではないかと思われた。また、ジャッジは何を聞いたかだけでなく、何回質問が行われ、それに回答されたか、その回数をカウントすることが役割であった。これには、参加者から、どのようなことを聞いたかだけでなく、回数チェックに追われ、中身が分かっていないことになるのではないかと質問があった。生徒の実態に合わせ、カウントさせることを第一としているということであった。

最終的に、相手側Bグループが話した内容を16文、リプロダクションすることが課せられた活動でそれをサマリースピーチとして評価することであった。参加者も実際に体験した。参加者の感想は、ディクテーションをするというリスニング活動で、内容を聞いたという感動や心を動かされるものがない。書き写すことに懸命になるだけではないかという懸念が述べられた。

検討すべき課題はあるが、ディベートという活動を授業に取り入れ工夫を重ねておられる小林先生の姿勢に敬意を表したい。報告詳細は、<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/course/pdf/report016.pdf>



ファイルを購入させ綴らせることにした。新出語を紙辞書で調べさせ、授業で確認・予習チェックした。

□ 授業

サイト・トランスレーションシートで音読重視の授業
予習プリントを使用し日本語空所()の解答を確認し、音読練習、文法解説を行う
次の時間：1パートを数名指名し、音読テストを実施。

□ 復習

なし
各自で音読テストに向け練習
次の時間に、1段落を制限時間以内に音読
6月の採用2年目教員の公開授業には、県指導主事、学校評議員(3名)、学校長・副校長・教頭、高校時代の恩師が来られる授業参観となり、その後の反省会で指摘されたことは；

□ 「負荷」をもっとかける

□ 単に音読させるだけでは、負荷がない。

□ 何のために音読させるのか。

□ 音読して何をするのか。

□ 音読のその後が見えなかった。

と厳しい指摘を受け、夏休み1年英語科で話し合うことになり、1学期の反省をもとに、2学期の授業について話し合った。

□ キーワード「負荷をかける」

□ どのように？

□ テスト？復習？やっぱり和訳？

ここで、話し合いに入った。配付された授業予習プリントは、教科書本文をチャンクごとに行替えた英文が左に右にはその行ごとに日本語訳が付され、ところどころに空所()があるものであった。まず、このチャンクごとに区切られた英文の朗読させることなどについての話しになった。ポーズ・リスニングを通して生徒自身がスラッシュを入れ、その後音読したりして理解する方法と予めスラッシュ等チャンクを示したプリントを配付して音読、理解の活動をした場合の有意味差は見られないとの報告があるとの参加者からの指摘があった。その場合、ポーズ・リスニングを通してスラッシュを入れることは時間の無駄になるとのことであった。また、ポーズ・リスニングを通してスラッシュを入れる作業で、生徒は内容理解も進めているかという問いには、機械的にポーズでスラッシュを入れているだけで、内容理解にはなっていないとのことであった。メカニカルドリルであって、meaningful drillではないことになる。また、その参加者が1年生でスラッシュ入りの英文を配り、チャンクの意を理解したと考え、2年生では自分で入れるようにさせたところ、どこに入れてよいか戸惑う生徒が多かったそうだ。1年生での活動が転移していないということであった。

プリント学習について参加者に何うと、生徒に本文をノートに写させる作業を指導されるか、教員がタイプ打ちしたプリントを配付するかの問いでは、時間のかかることはさせないことを考えプリント配付が多いということが分かった。中には配付したプリントをノートに貼らせていると回答される先生もおられた。日本語訳については、先渡し、後渡しかの差異はあったが、配付の傾向が見られた。チャンク分けしたスラッシュ入りの英文や訳など配付することは、生徒をエスカレーターに乗せたいだけではないか、生徒は自分の力を使わずに2階、3階へ上がって行く。現象としては上に上がっているけれど、本人の力の育成になっているのかどうか分からないと、むしろ階段を一步步自分で歩いて昇らせるように指導することが learner autonomy になるのではないかと。そのためには、確かなタスクを設定することが必要で、それがこそが英語授業のデザインの要ではないかという投げかけもあった。高校の新学習指導要領では、英語の授業は英語という原則があり、日本語主体の授業は問われてくるであろう。

それから、2学期・3学期の授業について話していただいた。紙面の都合上、お二人の報告の詳細は、<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/course/pdf/report015.pdf>をご覧ください。

当日、お二人の盛りだくさんの話題提供に司会がうまく時間調整できずにもっと聴きたいという雰囲気の中で終了した。本学の学生からは、「このような先生に高校時代に習いたかった」、「話を聴きながら感動で涙が出てくる思いだった」とのコメントがあった。参加者の先生からも若い二人の先生の発表に、「素晴らしい情熱で嬉しくなります。特にディベートは実行するまで、とても準備が必要で苦労されたと思います。感銘しました」「生徒をドンドン刺激してください。彼らの可能性は無限です。きっと「英語を使う」ことで、頑張りを生かしていきます」などのコメントがあった。

授業の玉手箱

「よい授業」についての一考察 中垣 芳隆

「よい授業」という言葉を聞いて、皆さんはどのような授業をイメージされますか。

先日、他大学の友人が、「良い授業の原理・原則を考える」材料として、学生達に尋ねた「高校時代の良かった授業」についてのアンケート結果を送ってくれました。ランダムに抜粋しますと、

- ・時間通りに終わる。
- ・教師と生徒がたくさんコミュニケーションがとれる。
- ・すごく厳しく予習チェックを行い、それを発表する場が多い授業。緊張感がある方が身がひきしまる。
- ・先生の人生経験が豊富で話を聞いているだけで、勉強になり、楽しく感じた。
- ・豆知識や身近な経験を話してくれる授業。
- ・問題の答がわからないとき、友人と相談したり、先生に質問することが許される授業。
- ・先生が勉強の仕方を教えてくれる。こう考えればこんなに簡単に解けるんだよ。
- ・現代文：先生が、毎回授業の初めに本の紹介をしてくれた。それによって、私も本を読むようになった。
- ・現代社会：自分たちが生きていく上で必要なものを探す授業。先生も各地を回っていろいろなことを調べているような人でした。
- ・英語：提示された課題への発問に対し、当たっていた時は誉めていただき、間違っていた時には更にアドバイスをいただいた。
- ・英語：先生が一人一人の生徒の発表に対して、短くてもコメントしてくれた。(great, good)
- ・数学：生徒がわからなそうにしている時には、無理に質問をせず、ヒントを与えたり、前時の内容の復習をしてくれる。
- ・英語：補足や小話など、様々な外国の知識を教えてくれて、とてもためになった。答のわからない生徒には、その生徒に応じたヒントを出し、答を引き出していた。
- ・英語：学びたいと思わせる雰囲気や自然と作り出せた先生の授業。
- ・地理：課題と説明のバランスがよく、あきない授業。
- ・英語：単語テストや様々な小テストを作ってくれる。生徒のこともとても熱心に考えてくれる先生の授業。

等々となっています。

敢えてキーワードを拾い出しますと、「熱意」、「生徒のため」、「厳しさ」、「誉める」、「時間を大切に」、「小話」、「飽きない授業」、「先生の人柄」等でしょうか。

こうして見ると、「よい授業」の要素については、今も昔も、教える側と教わる側の認識にも大きな変化がないように思われますが、いかがでしょうか。

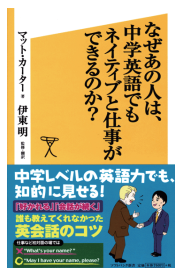
書籍紹介

『なぜあの人は、中学英語でもネイティブと仕事ができるのか?』

マット・カーター (著) 伊東 明 (監修・翻訳)。
2013. ソフトバンク新書. 798 円 246 ページ

日本の英語教育は「英語下手」を大量生産しているとしばしば批判される。子どもの頃には外国にあれほどあこがれを持っていた人たちが、学校を出る頃にはすっかり英会話恐怖症になってしまう。なぜ、このような事態になってしまったのだろうか。

ひとつの原因として学校の授業での制約があげられる。日本のように集団クラスで外国語を教える場合には、往々にして、「形式（語彙、



文法など)の提示、説明が授業の中心となり、形式の果たすコミュニケーション上の「機能」を体得させるだけの練習時間がとれないのである。

しかし、原因はそれだけではない。そのような練習不足の結果、日本人が英語にたいしてすっかり自信を失い、心理的な劣勢に追い込まれているのではないだろうか。その結果、英語をさらに遠ざけるという悪循環が生み出されているのだ。

本書は、このような英語下手な国民に「心理学的な」側面から活力を与えようとして書かれた本である。日本の英語教育に詳しい著者と心理学を専門とする監修者が企画立案段階から協力して作成したものであるという。著者は、「完璧な英語」を話さないと恥ずかしいと思う日本人特有の心理を指摘し、言葉の正確さだけにこだわるのではなく、豊かなコミュニケーション技術を得得することの大切さに目を向けるように説得する。そして、有意義なコミュニケーションを成立させる要因が言語以外にあることを具体的に示していく。

平易な説明と例文で書かれた一般書であるが、様々なレベルの英語学習者に勇気を与えらるとともに、英語教員にとっても production 活動をデザインする際の指針となる一冊である。

(寺 秀幸)

教育実習参観

本学の教職課程を移行措置として履修している大学4年生や科目履修生のうち8名が5月末を皮切りに教育実習に赴いた(8月末から赴く学生もいる)。数校訪れ、授業を見学させていただいた。実習生の授業展開には改善の余地が見られたが、その時点で持てる力を懸命に出していた。教室の全生徒がよく見えるようにと教壇の椅子の上に立ってフラッシュカードを使って単語の発音練習をしたり、教科書本文を一文ずつ短冊にタイプ打ちしたカードの束をペアごとに配付して正しい順に並べ替えをさせたりと、生徒の学習意欲を高めようと懸命に授業に打ち込む姿があった。そうしたひたむきさは大切である。一生懸命授業に取り組む教員・教育実習生を生徒はしっかり見抜く。そういう熱心な先生に生徒は心を動かされる。指導技術だけでなく、熱い気持ちが生徒の学習意欲を生み出す原動力の一つとなる。(な)



編集後記 / 第18回勉強会案内

ロンドン・オリンピックが始まる。Global Competitionの舞台の一つであろうか。そう言えば、文部科学省も経済産業省も「国益に資する」を枕言葉にグローバル人材の育成を急務としている。地球市民という基盤発想ではない。それでも地球が一つになって集う競技会、ひたむきに人間の力を見せてくれる選手を応援したい。

*** 第18回勉強会「英語の教え方教室」***

2012 (平成24)年10月20日(土) 14:00 ~ 17:00

「大阪女学院大学教職フィールドワーク課題研究発表」

今回の勉強会では、教職フィールドワーク英国に参加した学生が課題研究発表を行い、現場の先生にも役立つ英語教育情報を提供するとともに、現地資料で作成した教材も紹介する予定である。学生の新鮮な感覚でまとめた課題研究に対し、参加者の皆様から建設的なコメントをいただければ幸いです。



大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp